

研修報告書No. 2 2

所 属：県外大学病院病院 研修医

研修先：本山町立国保嶺北中央病院

大川村国保小松診療所

高知市土佐山へき地診療所

今回私が地域研修の場として高知県を選択した理由は、香川県出身であり馴染みのある四国で地域医療を経験したいと考えたからです。今回研修させて頂いた嶺北中央病院は、一面を山と川に囲まれた自然豊かな場所で、同じ四国と言っても想像していたもの以上の僻地での研修となりました。診療圏は、本山町、大豊町、土佐町、大川村の4町村で、診療圏人口は約13,000人、高齢化率45%の地域でした。嶺北中央病院は病床数が約100床の病院ですが、医師や看護師の他に薬剤師、放射線技師、検査技師、栄養士、理学療法士、ソーシャルワーカー、事務の方など多くの業種で成り立っており大学病院とほぼ同程度の検査を行える一方で、それぞれの業種がより密となって全体で医療を行っているのが強く伝わってきました。医療スタッフは患者さんの家庭環境まで把握し、その人その人に合った医療やサービスを提供できるよう患者さんに寄り添った医療がなされていました。近くにはデイケアや特別養護老人ホームが隣接しており、地域包括医療が行われていました。また、24時間体制で救急車の受け入れを行っており、ここでの治療が困難で急を要する場合には近くにあるヘリポートから市内の病院へ緊急搬送することも可能な環境でありました。

総合内科の先生方は、所謂理想の医師像とされるような先生方ばかりで、専門分野にとられることなく内科全般の診療・検査・治療を行っていました。地域医療では昔ながらの治療を行っているイメージでありましたが、嶺北中央病院には優秀な先生方が揃っており、僻地にしては都心とあまり変わらない治療がなされているように感じました。週に2回のカンファレンスでは、入院中の患者さんの画像評価や治療内容などを医師全員でチェックするなど、なるべく多くの人目に行き届くよう考慮されており安全に治療が行われていました。また、内科以外に外科、整形外科、脳神経外科、泌尿器科、婦人科、皮膚科など専門性の必要な科の外来も設けられており、多くの患者さんを診察できる環境にあり、また医療者側としても比較的コンサルトしやすい環境でもありました。

この地域研修で何より印象的であったのは、外来や診療所に来る患者さんの笑顔です。「痛うて痛うて」と言いながらも笑顔で診察室に入って来るのには違和感がありました。交通手段や日用品などの買い物が大変であるにも関わらず、笑顔で病院に来るというのはこの病院を頼りにしている以外にも地域が一丸となって住みやすい環境を作っているからだと感じました。そう思うと、僻地医療の問題点として良く医師不足だとか十分な医療を提供できないことが挙げられますが、単純に医師数を増やし、高度で最先端の医療を提供できる環境に変えた所で、それが直接患者さんの利益につながるとは限らないなと感じま

した。医療スタッフ一人一人の負担を減らすために代わりとなるスタッフを確保しておく環境作りは大切であると思いますが、僻地医療に最も必要なのは患者さんの病気への意識の高さではないかと感じました。意識が高まることで、食事内容や生活習慣の改善につながり地域の方々が笑顔で暮らしていけることにつながるのだと思いました。

1か月という短い期間でしたが、地域医療の現状を学ぶ機会を作ってくださいありがとうございました。今後専門分野に進みますが、ここでの経験を糧に精進していきたいと思っています。ありがとうございました。